

## 「穴」の存在論を再検討するために

——ハイデガーとティム・オブライエンの視点から——

鈴木 康則（慶應義塾大学）

### *Re-examining the ontology of the hole from the perspectives of Heidegger and Tim O'Brien*

Yasunori SUZUKI

This article aims to introduce a new approach to the problem of the metaphysics of the hole argument, wherein the difficulty consists in the ontological status of the hole. To examine this question, we refer to the arguments of the Thing in Heideggerian texts and the context of the hole that Tim O'Brien's protagonist is digging in his novel *The Nuclear Age*.

Heidegger phenomenologically analyzes things as vessels or bridges. A vessel and a bridge need a vacancy and a boundary, respectively, which are not real entities. Similarly, a hole does not exist as physical being, but is the name for the quality of a vacancy or void. It can be treated as a negative existence.

In *The Nuclear Age*, however, the hole is treated as a material existence, and appears as an interlocutor. Here, the hole is not a mere attribute; it can be cognized as an existence. The hole, which stands only for a negative quality from a physical perspective, becomes, in fact, a symbol for the intuition. By juxtaposing Tim O'Brien's conceptualization of the hole with Heidegger's arguments, we conclude that the intuitive essence and the negative description of the hole, both, need to be recognized as inevitable factors in the hole argument.

**keywords:** Heidegger, O'Brien, Metaphysics, Ontology, Hole

**キーワード:** ハイデガー、ティム・オブライエン、形而上学、存在論、穴

## はじめに

事物が感覚の対象であること、この点は一見自明であるように思われるが、本当にそうだろうか。「机」や「コップ」には触れることができ、もちろんそれらを視野に収めてその形状を観察できる。しかし例えば現代形而上学で話題となった「穴」を例に考えてみると、「穴」が感覚の対象なのかどうかは疑わしい。「穴」に触れることはできるのだろうか。地面や壁の「穴」に指を突っ込んだとしても、それは窪みであり、単なる空気ではない。「穴」を構成している地面に触れているとしても、それは結局「土」の感触ではないのだから、やはり「穴」それ自体に「触れる」ことはできていない。「穴」がいかなる仕方存在するのか、言い換えれば「穴」の存在論的な身分は自明ではない。

ただし「穴」だけが特殊な存在論的領域を形成している、と主張したいわけではない。「はさみ」の「持ち手」部分や「コップ」の「空洞」部など、事物は欠如的な部分を持っているように思われる。「事物」あるいは「物」が備えているような欠如的部分をどのように扱うべきであろうか。この点についてはハイデガーによる「物」についての議論および、作家ティム・オブライエンによる「穴」についての描写を手掛かりにしつつ、「穴」の存在論、ひいては事物一般の存在論的様相の射程について考察してみたい。

### 1. ハイデガーにおける「瓶」と「物」

本稿が主題的に扱う「物」講演<sup>1</sup>は、ハイデガーが1950年にミュンヘンで行ったものである。加えて、翌年ダルムシュタットで行われた「建てること、住むこと、考えること」という講演の内容にも必要な範囲内で言及する。ミュンヘン講演に先立って、ハイデガーは1949年でのブレーメンでの連続講演においても「物」を主題としていたのであるが、内容の異同<sup>2</sup>についてはここでは立ち入らないことにする。

ではハイデガーの「物」講演の概略を辿っておこう。まずは「距離」の話から「近さ」と「遠さ」が話題となる。ハイデガーによれば、「映画」や「ラジオ」のおかげで「遠く」にあるものが「近く」にあるように思われることがあっても、それは「距離」が小さくなっただけで「近さ」となるわけではない（GA 7 167/16-17）。「距離」を縮めることでは「近さ」が生じないとするなら、「近さ」とは何なのか、とハイデガーは問う（GA 7 167/17）。

このように問いに付された「近さ」は、「物」との関連から探求される。「物」の例としてまず挙げられるのが「瓶（<sup>かめ</sup>Krug）」である。なぜ「瓶」が例として提出されているのかについて、ハイデガーは特に説明をしていない。またハイデガーの「技術」論を主題とする研究の多くは、「物」講演の最初になぜ「瓶」が登場するのかという点について、その理由を考察していないように思われる。この点については後ほど立ち入ることにしよう。

<sup>1</sup> 「物」講演および「建てること、住むこと、考えること」については、ハイデガー全集版の頁数と『技術とは何だろうか 三つの講演』での頁数を記しておく。

<sup>2</sup> この異同については、稲田および『技術とは何だろうか』に含まれる森一郎による「編訳者まえがき」を参照。

ハイデガーによれば、「瓶」が「物」と呼ばれるのは「容器 (Gefäß)」として機能しているからであって、「瓶」の「空洞 (Leere)」あるいは「無」の部分が「瓶の本体」ということになる。「本来的に納めるはたらきをする部分が、瓶の空洞に存しているとすれば、ろくろ台をまわして壁面と底面を形づくる陶工は、ほんとうは瓶を製造していないこととなります。陶工は、粘土の形を作っているだけです。いや、そうではなく——空洞の形を作っている、というべきです」(GA 7 171/24)。

この「空洞」に水やワインを注ぎ入れる場合、科学的知識の観点からすれば「空気」が「液体」に置き換わるということになる (GA 7 171/25)。このような科学的知識が「物」の把握にとって充分なのかどうかの問題となり、「原子爆弾」についても言及されつつ、「空洞の本質」が「捧げる」点にある、と論じられる (GA 7 173/30)。ハイデガーのいわゆる「四方界」<sup>3</sup>が語られた後、thing や res 等の語源的探求が提示され (GA 7 176-177/34-38)、「私たち」が「物」に呼びかけられており、その「近さ」にあるとされる (GA 7 182/48)。

「物」講演において着目されるのは「瓶」<sup>4</sup>である。だがなぜ「瓶」が話題となるのか。「瓶」でなくてはいけない理由があるのかどうか、少し立ち止まって考えてみたい。

ハイデガーが論じる「物」に注目する場合、それがどのような文脈において主題化されているのかについて、ここでは便宜的に三つのグループに分けることができるだろう。

第一に、「物」が備えている物体的形状および具体的な用途などに対して注意が払われないグループ。これは『存在と時間』で記述される様々な「物」が該当する。「道具」は「～のために」存在し、「机」や「窓」、「部屋」等、他の「道具」との「連関」の内にあるという指摘の際に言及される例が含まれる (SuZ 68)<sup>5</sup>。こうした例においては、「机」や「窓」の形状が記述されるわけではない。「手許的存在性 (Zuhandenheit)」<sup>6</sup>の例として挙げられる「ハンマー」も、その形に注意が向けられるわけではなく、また「釘を打つ」という具体的な用途が特権的事例として扱われているわけではない (SuZ 69)。

「道具」としての記述以外にも、「アイデア」との関連で「机」等が語られたり (GA 6-1 153/150)、「ピュシス」の議論における例として「机」が登場する例 (GA 9 251/309)、デュナミス/エネルギーとの関連で言及される例 (GA 9 284-285/357-358)、「存在」と「存在者」の違いを考える際に言及される「チョーク」(GA 40 32-33/34-35) 等、様々な「物」に言及されつつも、その形状等が記述されない事例が多くあることが確認できる。

第二のグループは、「芸術作品」との関連において「物」の具体的な形状が詳細に記述されるケースである。ここには「芸術作品の根源」で論究される「靴」が含まれる。「芸術作品の根源」ではまず「物」が主題化され、「瓶は物であり、路傍の井戸も物である」(GA 5/11)と論じられるが、「瓶」が具体的に論じられるというわけではなく、「道具」について言及された後に、ゴッホの描いた「靴」の具体的な形状が記述される。

<sup>3</sup> 「四方界」については『ハイデガー事典』349頁参照。

<sup>4</sup> なお管見の限りでは、「瓶」という語は『存在と時間』には登場していない。

<sup>5</sup> 1923年の講義『事実性の解釈学』において既に「机」という例をもとに、「日常的世界」の誤った記述、そして適切な観点としての「手許的存在性」が語られていた。この講義の末尾部分では「鋤」や「家」と並んで「瓶 (Krug)」が挙げられているが、「瓶」の特徴等についてのより詳細な記述はなされていない。

<sup>6</sup> 「手許的存在性」という訳語については『ハイデガー事典』に従った。同書398頁参照。

第三のグループは「物」がその具体的形状等について記述され、人間と当の事物との「近さ」が問題となるケースであり、「物」講演をはじめ、「ブレーメン講演」、『ハイデッガー全集 77 野の道での会話』や、「建てること、住むこと、考えること」もこのグループにまとめて良いだろう。本稿が着目するのはこの第三のグループにおける「物」の記述であるが、上記のグループ分けはあくまで便宜的なもので、網羅的でないということに加え、厳密にその分け方が適切かどうかはここでは立ち入ることができない。たとえば「技術とは何だろうか」における「銀」は「皿」の材料として論じられ（GA 710/102）、「供儀」のために用いられるとされるのだが、「銀」を第一・第三のどちらのグループに数え入れるべきかは一考の余地があるように思われる。

第一のグループにおいて、「道具」としての「指示連関」を持つとされる諸事物が話題となるのだが、ハイデッガーはこの議論に依拠し続けるのではなく、なぜ第二、第三のグループへの記述に移行したのかを検討する必要がある。

本稿が主題的に扱う「物」講演からすれば、「物」は「道具」として記述されるのではないことが確認できる。また「道具」という語は「ブレーメン講演」（GA 79 28/37）や「技術とは何だろうか」（GA 7/97）に登場しているとはいえ、「指示連関」や「全体性」と関連づけられることはなく、『存在と時間』での記述の仕方と全く異なる。「手許的存在性」および「事物的存在性（Vorhandenheit）」という『存在と時間』での対比からすれば、「物」講演は「手許的存在性」から「事物的存在性」へと記述の比重を移したように見えるかもしれない<sup>7</sup>。ただし本稿はこのような観点を採用しない。ハイデッガーは『存在と時間』において「事物的存在性」を「手許的存在性」の「欠如」態として記述していたのだが（SuZ 73）、門脇は「事物的存在性」は「適所性（Bewandtnis）の抹消」あるいは「コンテクスト性の無効化」<sup>8</sup>と結びついている点を重要視する解釈を提示していた（門脇 171-173）。筆者の理解では、「適所性」と「道具」という観点で「物」を理解することは、当の「物」が持つ個別の形状・機能に関心を持たない。門脇の解釈に従うなら、『存在と時間』でのハイデッガーは「適所性」という視点のみで「物」を記述していたわけではない。本稿では門脇の解釈を手掛かりに、「適所性の抹消」がただちに「事物的存在性」を重視することとは別である、と考えておきたい。というのも「それ自体」という表現が「物」講演に見出されるが（GA

<sup>7</sup> ハイデッガーが「手許的存在性」についての記述から、後に別の仕方での考察を始める点について、荒畑は以下のように述べている。「有意味なもの総体としての世界は、いずれ後年のハイデッガーがみずから認めることとなるように、手許的存在者間の差し向け連関だけでは構成できないし、またいずれにせよ、多くの論者が指摘しているように、彼が「眼前性（Vorhandenheit）」と呼ぶ存在カテゴリー——伝統的には客観性ないし対象性と呼ばれてきたもの——が派生的でしかないかのように考えることは、やはり無理なのである」（荒畑 155 頁）。

<sup>8</sup> 門脇の用いる「コンテクスト性」という表現には若干の問題が生じることを指摘しておきたい。「物」講演において「瓶」は「それ自身」で「立つ」のであるが、それはあくまで「道具」の「指示連関」としての「コンテクスト」が「無効化」されるというだけで、たとえば「瓶」は「捧げる」ことにおいて「四方界」との「コンテクスト」が保持されるとも記述できるからである。「コンテクスト」と表現するよりも、「道具的支持連関」が「無効化」あるいは「抹消」される、と記しておく方が誤解はより少ないと思われる。

<sup>9</sup> 「関心を持たない」という点について、ハイデッガー研究の文脈では「無差別相（Indifferenz）」（『ハイデッガー事典』428 頁参照）と関連する。須藤はこの「無差別相」が「本来性」「非本来性」といかなる関係にあるのかという鋭い問題提起を行っており（須藤 11）、Indifferenz にどのような訳を与えるべきかという点を深く掘り下げる点において、気づかせてくれる点が多かった。

7168/19)、ハイデガーは「事物的存在性」としてその記述を採用しているわけではないからである。ハイデガーの「物」講演における「それ自体」としての「物」というのは、あくまで「大地」から「制作」によって立てられるという主旨であって、そのような記述は『存在と時間』で論じられていた「事物的存在性」の内実にはそぐわないと思われる。

「物」講演で着目される「瓶」は、さしあたり「事物的存在性」としてではなく、「物理学」などの「科学的知識」の観点から考察されている（GA 7 171-172/25-26）。この観点によれば、「瓶」の内部は「空洞」ということになり、「陶工」は「空洞」を「制作」する、という不可解な記述が生じてしまう（GA 7 171/24）。こうした記述の不十分さについて、ハイデガーは「瓶の空洞」の「本質」がいまだ「熟考」されていない旨を述べ（GA 7 173/28）、その後で「捧げる」ことや「四方界」への議論に移行する。

「物」講演での「瓶」に着目した森は、上記のハイデガーの記述を「空洞の現象学」と見なす解釈を提示している（森 66）。「空洞」は「瓶」にとって「納める」とことと「注ぐ」ことのために必要であり、「空洞」の「本質」は「捧げる」ことに存するとされる。ハイデガーは「現象学」という語をこの箇所では用いてはいないが、「瓶」の具体的な形状の分析から出発する点には確かに「現象学」的分析と呼びうるだろう。ハイデガーは「瓶」が「捧げる」ことを發揮する点において、「物」という語と結び付けている。「納める」とことと「注ぐ」ことは「瓶」に固有な事象であると思われるが、「物」は一般的な名称である。「瓶」についての記述が「物」一般にも当て嵌まると考えて良いのかは自明ではない。次節ではこの点について考察しよう。

## 2. 「空洞」と「境界」の現象学

### ——セーレン・リースの解釈から見えてくるもの

「物」講演における「空洞」（あるいは「空洞の現象学」）は、「物」を論じる際にどのような位置づけを与えられているのか。「四方界」が重要であって、「空洞」は必ずしも必要のない論点なのだろうか。いかなる「物」も「空洞」を持つとするなら、「空洞」を論じることは「物」一般についての理解に資するところがあるはずだが、ハイデガーは「空洞」がいかなる「物」にも存するとまでは語っていない。「物」講演での議論に従うなら、「瓶」は「四方界」（「大地」「天空」「神的な者たち」「死すべき者たち」と関連し、「供儀」や「捧げる」という意義を担わされている。この点について、ハイデガーの技術論を扱ったセーレン・リースの議論を手掛かりに、「瓶」についての意義を考えてみたい。

リースはハイデガーの技術論における「瓶」を重要視するのだが、それは「瓶」が「空洞」を持つという議論に着目するからではなく、「神」的なものと関連する「供儀」という性質を持つ点に重きを置くからである。ハイデガーによる論考「芸術作品の根源」の冒頭では「物」が論じられ、「芸術作品」および「神殿作品」が語られるという議論の流れを踏まえ、リースは次のように述べている。「[瓶のような] 備品は芸術作品と同様に、制作者の意図から切り離されうるのであって……それは芸術作品の一つとして見なされうるし、

思考されうるのである」（Riis 133）。

リースは「芸術作品」と「備品（equipment）」を同一視する。リースが両者の同一性を主張するに至るのは、「神」が「瓶」および「芸術作品」と関連することを強く読み込む点にあると思われる。リース曰く、「ハイデガーが神殿について理解していることにとって重要なのは、神殿自体が神的なものなのではなく、むしろ「神殿を通じて、神が神殿の内に現前すること」（GA 527/38）である。供儀の瓶と同様に、神殿は神が現前するための一種の装置として、すなわち神の一つの備品として叙述されうる」（Riis 134）。

ここでリースの解釈を取り上げたのは、「瓶」が登場する議論のポイントとして、「四方界」あるいは「供儀」の要素を読み込み過ぎると、リースのように「瓶」そのものの位置づけが不要になる危険性が生じる、ということを確認せんがためである。リースは「ハイデガーの理解においては、備品と芸術作品の違いは偶然的である」（Riis 137）との解釈を提示する。リースにとっては「空洞の現象学」は「物」についての理解に必須ではない。

ハイデガーの技術論を論じる森は、ハイデガーが「捧げること」に言及する地点において、「現象学的記述の転換点」が生じていることを指摘している（森 68）。「空洞の現象学」で始まる議論が、突如「天空と大地の婚礼」などの記述へと移行することによって、「面食らう読者も多い」ことも森は注記している（森 68）。この「記述の転換点」は「瓶」の議論にとってどの程度必要なのか、そして「記述の転換」に先立つ「空洞の現象学」は「物」の議論にとって必要なかどうか、検討せねばならない。

リースの立場のように「空洞の現象学」を重要視しない解釈は可能かもしれない。ただし「空洞の現象学」は「物」一般の議論に欠かすべきではない。なぜそう主張したいかといえば、「建てること、住むこと、考えること」で扱われる「橋」についても、「空洞」という語は登場していないにもかかわらず、「瓶」と同じような「空虚」無しには「橋」は「橋」たりえない、と思われるからである。

講演「建てること、住むこと、考えること」において、ハイデガーは「四方界」に言及したうえで、「住むこと」と「物」との関係を重要視する。「物たちのもとの滞在こそ、四方界における四重の仕方での滞在がその都度統一的に成し遂げられる、唯一のあり方にほかならないのです」（GA 7153/73）。この「物」の例として挙げられるのが「橋」である。ハイデガーは「兩岸」がまずあって「橋」が架かるというのではなく、むしろ「橋」によって「兩岸」が出現すると述べて、さらに「橋」や「川」の風景を論じる（GA 7154/74-75）。「橋」が「兩岸」を生み出す点、そしてその美的外観を論じる点は、実はジンメルがそのエッセイ「橋と扉」で論じていたことでもあった<sup>10</sup>。だがジンメルとは違い、ハイデガーは

<sup>10</sup> 「……橋は私たちの意志の領分が空間を超えて拡大していく姿の象徴となる。川の兩岸が離れているだけではなく、「分離されている」と感じるのは私たちに特有のことだ。もし私たちが、私たちの目的思考や必要性や空想力のなかで兩岸をあらかじめ結びつけていなかったとしたら、この分離概念はそもそも意味をもたないだろう」（Simmel 56/92）。「きわめて一般的に言えば、風景のなかの橋はひとつの「絵画的」要素として感じられる。というのも、橋によって自然的所与の偶然性が、完全に精神的な性格のものとはいえ、ひとつの統一性へと高められるからだ」（Simmel 57/94）。本稿の見るところでは、ハイデガーの「橋」論とジンメルの思考との共通性は見取れるのだが、管見の限りではハイデガーがジンメルのエッセイに肯定的に言及している箇所は見出せなかった。ハイデガーによるジンメル評については『ハイデガー事典』476-477頁参照。

「橋」が「物」としての「取り集め」を行う点（GA 7 154/75）、そして「橋」それ自体が「空間」を「空け渡す」点を論じている（GA 7 156/78）。

この場面において「橋」が「空間」を持つとされる論点の本稿にとっては重要であるが、もう一点、「境界」の重要性に言及される点も見逃せない。「境界とは、そこから何かはその本質を発揮し始める起点なのです」（GA 7 156/79）とハイデガーは語っている。「橋」と「境界」の次に「建物」および「家」へと議論が移行するのだが、まず「橋」は「間の空間」とも呼ばれる（GA 7 157/80）。ハイデガーの議論に即した言い方をすれば、森が整理するように、「橋」は物質として「建てられ」ることによって「四方界」に「宿り場」を提供し、そこにおいて「空間」が「取り集め」（「空間」は「橋という種類の物によって、取り集められるのです」（GA 7 156/79））られる、ということになるだろう。

「橋」の議論においては「境界」と「間の空間」に言及されているのだが、この論点は「物」講演での「瓶」にも当て嵌めて考えることができるのではないか<sup>11</sup>。ハイデガーによる「物」を主題化する際に、「瓶」「橋」「家」<sup>12</sup>だけが「物」とされるわけではなく、その講演の末尾では道端の様々な事物も「物」と呼ばれていた。「四方界」との関連において、「物」は「物」となることが論じられていた。「物」には「四方界」が集約しているというハイデガーの表現をどのように解するべきかについては難しい問題が残るとしても、物理的・物質的な側面から記述された「空洞」という様相だけでは「物」の理解として不十分なものであるという点は確認できるだろう。この不十分さについて、次節では現代形而上学の「穴」をめぐる問題と併せて検討してみよう。

### 3. 現代形而上学における「穴」の問題

「穴」をめぐる問題を扱った加地は、その著作『穴と境界』において、「穴」が「空洞」であり、かつ人間の生に欠かせないという論点を提示している。「部屋は通常、「家屋」というより大きな空洞の一部分である。その家屋が位置する私たちの居住地域も、原始的野生の荒野の中に開けられた一種の穴であるといえるかもしれない。生物が生を安全に確保するためには、多かれ少なかれ何らかの囲い込みを行わなければならないとすれば、「環境」というものは、本質的にすべて「穴」的な構造を持たざるを得ないだろう」（加地 33）。だ

<sup>11</sup> ここでの筆者の立場は、ハイデガーによる「瓶」や「橋」の記述が単に該当の対象のみに当て嵌まるというわけではなく、「物」一般を見据えている可能性を持つと解釈するものである。筆者によるこの解釈は、門脇が『理由の空間の現象学』において、「可能性の先行的制約という存在論的ア・プリオリ」を「事物的存在者」との関連で考察し（門脇 168）、同時に「存在論的ア・プリオリ」を「改訂」する「思考の動き」をも見据えるという視点に（門脇 176）、多くを負っている。門脇の視点は、クリチリーのように「事物的存在者」の位置づけを重要視しない解釈（クリチリーは「自然的態度は……眼前的な態度をもって」、経験を「非現象学的に歪曲すること」（クリチリー 42/65）と述べている）に比して、「物」講演理解にも役立つ視点を提供している、と見なしうるだろう。

<sup>12</sup> 「家」も「橋」と同様に、「空虚」が無ければ「家」たりえない。ただしハイデガーは「橋」とは違い、「家」が「住まう」ものであることに着目する。この点について河野は『境界の現象学』の第七章において、ハイデガーの「家」論についてフェミニズムの観点のみならず、「ヘスティア」および「ウィルダネス」という視点からの興味深い考察を行っている。「ヘスティア」については、小田切が河野のハイデガー論に寄せた論評も参考になる（小田切 16-18）。

が「穴」が至る所に「存在」するように見えるとしても、「穴」は実は「空洞」であるから、「穴」の「存在」が問題になってしまう、というのが加地による整理である。「穴を穴たらしめる一つの本質的要件は、そこに何もないということである。穴は無によって存在する、という逆説的構造がそこにはある。また、穴が存在するとすれば、それは時空間の中に存在する以上、「具体的な対象」であるはずである。しかし、それは「物理的な対象」すなわち「物体」と言えるだろうか？ むしろ物体の欠如によってこそ穴たり得るのだとすれば、やはり物体とは言えないのではないか。もしも言えないとすれば、穴の存在を承認することは、「非物理的な具体的対象」の存在を承認することになる」（加地 34-35）。

「穴」の問題にアプローチするに際し、加地は「考え方次第」「どちらでもよい」というような態度を採用しない。「どこまでも考え方次第ということはある得ない……考え方の幅には常に限度がある。その限度は、他の事柄に関する諸々の考え方との整合性によって、そして何よりも実在によって、制限される。したがって、考え方次第という答えを与える者は、どの程度まで考え方次第なのか、ということを示す義務がある」（加地 46-47）。

「穴」の「存在」を検討する際に、加地は先行研究から幾つもの論点を引き出しつつ興味深い議論を続ける。「タイヤ」や「ペーパー・ロール」等の「具体的個体」（加地 42）であれば、質量を持った物質部分は「移動」や「回転」が可能である。だがその場合、物体に付属しているように思われる「穴」も、同様に「移動」や「回転」が可能なのだろうか。

例えば「穴」は「移動」し、かつ「回転」するという立場を採用する説としては、ルイス夫妻は「内壁 (hole-lining)」<sup>13</sup>説を主張する。「穴」を「穴」たらしめているのは、「穴」を支えるように見える「内壁」に他ならないとする考え方である。この説によれば、「穴」は存在しているのではなく、存在しているのは「穴」を構成する「内壁」や「表面」である、と整理できよう。この説に従うなら、「穴」は「回転」するし、かつ「移動」も可能である。だが筆者の見るところ、「穴」が「移動」や「回転」をしているのではなく、単に「内壁」が「移動」「回転」しているだけで、「内壁」説は「穴」を記述していない。

加地は「内壁」説以外にも、「否定的部分説」（ホフマンとリチャーズ、加地 58）、「欠如体説」（ホフマンとローゼンクランツ、加地 66）、「依存的非物質体説」（カサティとヴァルツィ、加地 76）を検討し、自らの立場を「依存的形相体説」（加地 85）としている<sup>14</sup>。加地によればこの説による「穴」は、「移動はできても回転はできない対象」（加地 90）として扱われる。「移動」が可能となるゆえんは、「穴」の「外的境界」が移動できるからである。「回転」ができないのは、「回転」は「穴」の形状を変化させるとしても、「回転」はその物体としての「ホスト」が「回転」しているのであって、「穴」が「回転」するわけではない、と考えられるからである<sup>15</sup>。

これらの事例については柏端が明快かつ有益な整理を提供してくれているのだが、ここ

<sup>13</sup> 「内壁」という訳語は柏端によるものであり、加地は「穴回り」と訳している。

<sup>14</sup> 加地による整理以外にも「穴」を論じる立場はあるだろうが、ここでは立ち入ることはできない。たとえば Wake らは音楽などの録音に用いられる CD を例に、「穴」を「時空域 (regions of spacetime)」と見なす解釈を提示している。「穴」を「力能」等の観点から考察するより新しい議論については（加地 2017）参照。

<sup>15</sup> 『ワードマップ 現代形而上学』では、「穴」の例として「ドーナツの穴」および「地軸」が挙げられている。同書 257 頁参照。



では本稿の観点から加地の立場について評価してみよう。「瓶」は「空洞」を持つのであるから、加地が論じるような「穴」と同じような身分を持つ存在者である、と考えられよう。

「瓶」を回し、移動させる際に、その「空洞」は「回転」し、「移動」しているのだろうか。

加地は「穴」が「動く」ことに疑念を挟まない。「穴はもちろんできごとではないし、空間領域とも異なる。なぜなら、穴は動くことができるからである。私が動けば私の鼻の穴も動く。ピンポン球が投げられればその中の空洞も動く。しかし、最初に私の鼻の穴や球の空洞が位置した空間領域そのものが動くことはない」（加地 42）。

ハイデガーの議論において、「瓶」の中の「空洞」を理解することは、当の「瓶」を把握するには「不十分」な記述とされていたことがここで重要になる。加地の言う「鼻の穴」や「ピンポン球」においてはその「空洞」的部分は確かに「移動」可能であるようにも見える。だが「橋」の事例ではどうだろうか。「橋」はその物質的部分の上を人や車が通行することで「橋」たりえるのであって、「橋」はいわばその上に「空虚」を持っているはずである。たとえば奥多摩湖の麦山の浮橋のように、「橋」自体が若干の「移動」が可能である場合、「橋」が持つとされる「空虚」は「橋」と同時に「移動」するわけではないだろう。ここでの議論のポイントは、「瓶」の中を「空虚」や「穴」（の一種）として扱う観点は、対象の記述としては不十分になる、という点である。

では「穴」や「空洞」「空虚」といった対象にどのように向き合うべきなのか。ハイデガーが論じる「物」について、高屋敷は「物」には「振る舞い」が見出せるという興味深い論点を提出している（高屋敷 6-7）。高屋敷は「物」（ここでは「恵みの樹」）が「世界」を担う点と、「四方界」への指示が行われている点に言及している。ハイデガーは『言葉への途上』において、「物」が「言葉」によって、「純粹に事物としてあることによって輝く」

（GA 12 25/26）と述べていた。「世界と事物の親しさを生じさせるような根源的な呼びかけ」（GA 12 25-26/26）にハイデガーは注意を促すのだが、「事物」はそれ自体で性質を帯びているというよりも、「言葉」によって何らかの存在する仕方へと呼び出されているという事態に関心が向けられている。高屋敷の表現を借りるなら、「物」は「言葉」によってその「振る舞い」が露わになる、とでも言えるのではないだろうか。「瓶」であれ、その「空洞」であれ、「物」は「言葉」によって何らかの存在する仕方へと呼び出されるのであり、「言葉」に先立って「空洞」や「瓶」が存しているのではない、ということになるのではないか。

「言葉」が「物」や「空洞」に先立つという解釈は、ハイデガーの哲学的思考が教えてくれる点である。だが「言葉」の経験は哲学に限定されるというわけではなく、おそらく「文学」と呼ばれる営みにおいても確認できる。別様に言えば、「言葉」が「物」の有り方を規定するという経験に対し、そのような言語的经验一般を「文学」と呼ぶこともできるだろう。「言葉」こそが「物」あるいは「対称」を象るということ、この視点に立つことで「穴」の存在はいかなる様相を帯びるのだろうか。ここでようやくオブライエンにおける「穴」の主題を論じる地点となる。

#### 4. オブライエン『ニュークリア・エイジ』における「穴」の意義

ティム・オブライエンによる小説『ニュークリア・エイジ』<sup>16</sup>は、「岩穴」について描写される第二エズラ書（エスドラス書）のエピグラフが掲げられている。内容やあらすじについてはここでは省くとして、核の時代に一人の男が苦しみながらも生きる姿が描かれる。

この小説に冒頭から最後まで登場するのが、主人公が庭に掘る「穴」である。主人公が「穴」を掘っているのは確かだが、彼がその主導権を握っているわけではない。「掘れよ、と穴が言う（the hole says）」のであって（NA 21）、彼はそれに応じているだけで、とも見えるからである。その「穴」がいかなる目的のために掘られているのかについては解釈の分かれるところではあろうが、本稿では「何のためかは分からない」と考えておこう。

娘のメリンダは「穴」を掘る目的を尋ね、主人公は「シェルターだよ」と答える（NA 17）。主人公は核戦争の恐怖に怯える少年として描かれていたのだから、彼が大人になってから掘る「穴」も同様の役割の「ために」掘られていたとも考えられる。1986年に『ニュークリア・エイジ』に寄せられた書評では、主人公は「自身の悪夢を取り除くため、家族のための核シェルターを掘り始めた」と書かれている（Mulvihill 169）。だが私見では、この見方は「穴」の存在をわかりやすい次元に回収し過ぎている。この小説が担っている「穴」は、単なる「シェルター」という役割には収まっていないはずなのである。

この作品では「穴」が様々なセリフを語るのだが、決して荒唐無稽な内容というわけではない。「なあ、おい、と穴が言う……ここにあるけどここにはない、存在するけど存在しないものってなんだ？……俺は不在の存在であり、存在の不在だ」（NA 361）。ダニエル・コードルが2007年に書いた『ニュークリア・エイジ』論においては、「冷戦」という政治的意義を主人公の行動と重ねる観点が提出されている。主人公が「穴」に爆弾を仕掛ける点について、「相互確証破壊という核政策戦略において採用されたものと同様の、攻撃的かつ自殺的な態度」（Cordle 112）とされるのだが、こうした観点では主人公が一種の「政治」や「政策」と同様の思考や計算に基づいて行動しているかのように見えてしまう。もちろん「政治」が既に自己破壊的で、思慮もなく行われているという観点なのかもしれないが、その場合でも「穴」が主人公に対して持っている意義が見て取られていない点が問題である。

鉛筆を集めて「シェルター」を作っていた少年が、その後に行動できたことといえば、「爆弾は実在する（THE BOMBS ARE REAL）」（NA 137）というプラカード掲げ、一人孤独に「カフェテリア」の入り口に陣取ることであり、同志と共に地下活動に参加することであり、最終的には「穴」を掘ることだった。主人公は「死」を恐れるが、ただし自分の「死」を回避するためのエゴイスタックな行動に終始しているわけではない。唇の腫瘍が進行してしまうサラが「私、死んでる！」（NA 532）と叫ぶように、この作品には「死」が至る所に散りばめられている。「核爆発」のみならず、こうした身近に押し寄せる「死」への予感から逃れられない主人公ウィリアムにとっての「穴」は、或る時には「聖書」の一節を語り、さながら「神」のように振舞う。「我々は在りて在る者なり。ほとんど在ったことが

<sup>16</sup> 『ニュークリア・エイジ』についてはNAの略号を使用し、日本語版の頁数を記す。

ありながら、永遠に在ることのないもの。一度も在ったことがないのに、永遠に在り続けるであろうもの」(NA 543)。

ウィリアムは「穴」の中で安心する場面も描かれるのだが、だからといって「穴」は彼にとって心休まる場所ではない。絶えず「穴」との会話に苛まれる様子は、彼が「穴」に取り憑かれているとも読み取れる。『本当の戦争の話をしよう』に含まれている「私が殺した男」という章で、主人公は自身が殺した男に空いた「穴」を見つめ続ける。その男の片方の「目は星の形をした穴 (a star-shaped hole)」になっていて、主人公がそのありさまから目を離せない様子が繰り返される。同僚から「見るのはよせ」と止められるにもかかわらず、主人公は「星の形をした穴」を見続ける。これはいわば「穴」に魅入られているのであって、主人公は自らそう願って「穴」を見たいというわけではないはずである。では『ニュークリア・エイジ』での「穴」はどのような意義を持つのだろうか。

この問題を考える手掛かりの一つは、エピソードの中に登場する男である。その男は「他者の姿」と「声」を求めている。この小説の主題は一見すると「核戦争」とその恐怖のようにも思われるのだが、ウィリアムが探し求めるのは「他者の姿」と「声」がある場所、すなわち「家庭」であるとも読めるのではないか。チアリーダーだったサラは、ウィリアムの家族に対し「家庭、素晴らしい家庭 (Home, sweet home)」(NA 525) と語るのだが、その言葉に対応するかのよう、「穴」は「家庭、素晴らしい穴 (Home, sweet hole)」(NA 540)<sup>17</sup> と皮肉めいた言葉を吐く。「穴」を掘ることはウィリアムなりの居心地の良さ、すなわち「家庭」の探求でもあり、他人の「声」を求めるやり場のない行為でもあったのだが、そこから聞こえる「穴」の声はウィリアムの求めたものではなく、結局そこに爆弾を仕掛けざるを得なくなってしまう。

「穴」が登場する文学作品はもちろん『ニュークリア・エイジ』に限られるわけではないのだが<sup>18</sup>、「穴」は人間にとって既知の存在というわけではなく、未だ知られざる「物」として呼び出されている。それはウィリアムの「言葉」が「穴」を「穴」たらしめているとも言えそうだが、「言葉」はウィリアムというよりも「穴」自身が「言葉」を発しているように記述されているので、ウィリアムでさえ主導権を持ってないような「言葉」が「穴」を生んでしまっていることになるだろう。いずれにせよ、オブライエンにおいて「穴」は単なる「空洞」や物理的不在というわけではなく、「言葉」によって呼び出された「存在者」として「振る舞」っている、とでも考えられよう。オブライエン的「文学」の経験は、「穴」を否定的存在として扱うどころか、「穴」が人と対等に語り合うほどの「存在」であることを教えてくれる。ハイデガーにおいて「瓶」は「捧げられ」ることでその本質が全うされることになっていたが、オブライエンにおいては「言葉」によって、「穴」は「不在」どころか何よりも圧倒的な「存在」と化すというような様相が記述されていたのである。

<sup>17</sup> 訳者の村上は、「ホーム・スイート・ホール」を「埴生の家」と訳している。

<sup>18</sup> 文学作品における「穴」としては、たとえば村上春樹作品における「井戸」が挙げられよう。井上によると、村上作品における「井戸」は、「作者の記憶の原初の体験を喚び起こす「みづ」と、垂直の距離に連環したその特殊な形状のために、村上春樹の創作世界で特殊な位置を得た」(井上 92) とされる。井上が村上作品に読み取るのは「井戸」だけでなく「みづ」および「川」の意義である (井上 90)。

## 5. 「穴」をどう考えるか ——ハイデガーとオブライエンを手掛かりに

『ニュークリア・エイジ』に登場するような「穴」は、果たして現代形而上学が語る「穴」と関連しうるのだろうか。この点については、まず柏端による指摘を引用しておこう。「穴が回転するかどうかについて、われわれが前理論的な直観をろくにもっていない点をまず確認しておきたい。穴を塞げ、穴を広げろ、穴が崩れないよう補強せよ……こうした命令において何をしろと言われているのかは明白である。だが、穴を回せと言われたとき、いったい何をすればよいのだろうか。ドーナツそのものを回せばよいのだろうか」（柏端 66）。

この指摘はおそらく重要で、同じ事態は「穴」の「移動」にも当てはまるだろう。加地は「穴」の「移動」を可能であると見なしているが、事物は「移動」できても「穴」が移動しているとは言えないように思われる。『ニュークリア・エイジ』に登場するような、庭に空いた「穴」を想像してみても良い。その「穴」を「数メートル移動してほしい」と言われた場合には、元の「穴」を埋めて別の場所に「穴」を掘るだろう。それは別の「穴」であって、「穴」が「移動」したわけではない。

柏端は「穴を塞げ」というような命令が「明白」であると記述しており、この点には同意するのだが、もしそうだとすれば「穴」についての「直観」をもたずとも、「穴」が一種の対象であるという点は共有されているはずである。柏端は「穴」を立体における「対角線」（柏端 80）と同様の存在と見なし、「穴」は一種の「抽象的」存在であると考え、「われわれが住むこの具体的な世界に穴は存在しない」（柏端 82）と結論づける。柏端が「プレツェルも表面はでこぼこしている」（柏端 82）ことに注意を促すように、パンや机でも多少の盛り上がりやへこみは観察されるわけで、その状態を柏端は「穴がある」とは見なさない。本稿なりに言い直すなら、物体の表面について「周囲よりも減って見える部分がある」と記述することは可能である。だが当の部分（「穴」）に見合う適切な「直観」が不明であるとしても、「穴」が具体的には「存在しない」というのも「直観」に反する記述になってしまうのではないか。

『ニュークリア・エイジ』での「穴」は「シェルター」というわけではなく、むしろ「穴」であることが本来のあり方であるように描かれていた。人間にとって、「穴」は何らかの「空虚」や他の目的のための付随的存在、あるいは「抽象的」存在として扱われるのではなく、「穴」それ自体を対象であるかのように見なしているはずである。例えば壁に空いた「欠落」「空間」（「穴」）に対し、「穴を塞げ」という命令をするのは自然であるが、「壁を延長しろ」とは言わないはずである。「壁が無いその部分（穴）にも壁を伸ばせ」という命令は可能であろうが、結局それは「穴」に対して別の名称を割り当てているわけで、「穴」的な存在として扱われるはずである。

## まとめと課題

これまでの流れをまとめておこう。ハイデガーが「物」講演で注目していた「瓶」は、

森が指摘するように、「空洞の現象学」と呼びうる探求を展開していた。私見では、この探求は「建てること、住むこと、考えること」で論じられる「橋」にも展開されており、「空洞の現象学」は「境界の現象学」と通ずると考えられる。「空洞」と「境界」の「現象学」は、「物」一般の「存在」の問いに繋がるもので、個々の「物」についてそれぞれの「現象学」が必要とされるわけではないはずである（たとえば「はさみ」「ハンマー」「耳かき」といった事物はそれぞれ「空洞」や「境界」を持つが、「はさみの現象学」等、各事物に固有な「現象学」が必要とされるわけではないだろう）。

ここでのハイデガーの知見は、現代形而上学における「穴」の議論と無関係ではない。この議論では「空洞」に対しどのようなアプローチをとるのが問題となるからである。ハイデガーによれば、「物」は「言葉」によってその「振る舞い」あるいは「本質」へともたらされる。「瓶」の「振る舞い」や「本質」は「捧げること」であり、「物」は「言葉」によってその特有の存在の仕方が露わにされる。物質的・質料的観点から「空洞」を記述することと、「物」の機能の観点から「空洞」を扱うことは、記述のパースペクティブが異なるのではないだろうか。物質的観点からすれば「空洞」は常に不在として扱われるだろうが、オブライエンにおける「穴」が単なる不在ではなかったように、人間の認識にとって「空洞」であっても「対象」や「存在」となることがある。人間が「物」や「穴」に対して持つ関係は、空間内での物質的な側面でのみ理解されてはならないだろう。

今回立ち入ることのできなかつた「芸術作品」論においても「物」についての議論がなされており、「空間」と「人間」、「物」との関連を考えねばならない。秋富の指摘するように、「作品」たる「エルゴン」は「デュナミス」「エネルゲイア」と共に、「真理」概念との関連においてハイデガーは論じているのであって（秋富 93）、デリダの「パレルゴン」概念<sup>19</sup>と今回の「物」論をどう結び付けてゆくのが今後の課題である。

「穴」は物質的には不在であるが、人間にとって「穴」は時に意義を持つ対象となりうることをオブライエンは語っていたように思われる。多くの人は幼児の時、砂場で「穴」を掘った経験があると思われるのだが、柏端が語ったように「具体的世界に穴は存在しない」のだとすれば、幼児は「穴」を掘るのではなく「砂」をかき分けていただけということになるのだろうか。むしろ幼児の目指すのは「穴」であり、質料を持つ「砂」の方が付随的な存在ということになるのではないだろうか。作家の色川武大による小説『百』において、主人公の父が掘る「穴」が話題となるのだが、その「穴」は何の用途にも向けられることがないものだった<sup>20</sup>。「物」は「空洞」を含む場合であってもそうでなくても、「言葉」

<sup>19</sup> 「パレルゴン」はデリダの『絵画における真理』で論じられる概念であり、本稿で言うところの「空洞」および「境界」の「現象学」という観点からの検討が今後の課題であるが、今回は立ち入ることができない。

<sup>20</sup> 「……戦争が押しつまった頃、父親が不意に畳をあげて、家の床下に穴を掘りだしましてね」「穴を——」

「ええ。はじめ家族は、防空壕を掘りだしたと思ったし、実際そう見えたんですが、そうじゃありませんでした。彼はそれからずっと、戦争が終わるまで、気が狂いでもしたように穴を掘り続けましてね。家のどの部屋の下も穴ぼこだらけにしまったんです」……

「それは、怒りのせいでしょうか。それとも屈託とか、不安とか——」

「わかりません。多分さまざまなものに追いつめられていって、そうするよりほかなかったのでしょう。しかし僕はそのとき、その穴ぼこを眺めていて、これは彼そのものだと思います。こ

によってその本質へともたらされるとというのがハイデガーの観点であったのだが、ハイデガーにおいて「物」は既に何らかの有り方へと規定されているように思われる。オブライエンや色川における「穴」は、その不気味な有り方は何らかの用途へと向かうものではないが、そのような用途不明なままの「穴」も人間にとっては「存在」となりうる。「穴」でさえ経験の対象となるように、「存在」はあらかじめ決められているのではなく、いわば「揺らぎ」とでも呼べるような振れ幅を持つように思われる。現代形而上学における「穴」の問題は、存在が持つ「揺らぎ」に着目している点で興味深いのだが、「言語」と「物質」との関わりからこの問題を思考することを今後の課題としたい。

## 文献表

ハイデガーの著作については以下の略号を用い、全集版は原書の頁数と邦訳の頁数、『存在と時間』については煩瑣を避けるため、原書の頁数のみを記す。

GA : Gesamtausgabe, Vittorio Klostermann, 1975-.

SuZ : Sein und Zeit, Niemeyer, 1967.

Andrew Wake, Joshua Spencer, Gregory Fowler, "Holes as Regions of Spacetime," *The Monist*, Volume 90, Issue 3, 1 July 2007, pp. 372-378.

Daniel Cordle, "In Dreams, In Imagination: Suspense, Anxiety and the Cold War in Tim O'Brien's *The Nuclear Age*," *Critical Survey*, volume 19, issue 2 (2007), pp. 101-120.

David K. Lewis, Stephanie R. Lewis, "Holes," *Australasian Journal of Philosophy* 48 (1970), pp. 206-212 (reprinted in David K. Lewis, *Philosophical Papers*, Volume 1, Oxford University Press, 1983, pp. 3-9).

Donald D. Hoffman, Whitman A. Richards, "Parts of Recognition," *Cognition* 18 (1985), pp. 65-96.

Georg Simmel, "Brücke und Tür," *Gesamtausgabe Bd. 12, Aufsätze und Abhandlungen 1909-1918*, Bd. 1, Frankfurt am Main, Suhrkamp, 2001, pp. 55-61. (ゲオルク・ジンメル「橋と扉」『ジンメル・コレクション』北川東子編訳・鈴木直訳、ちくま学芸文庫、1999年、89頁 - 100頁)。

Jacques Derrida, *La Vérité en peinture*, Flammarion, 1978. (ジャック・デリダ『絵画における真理(上)(下)』高橋允昭・阿部宏慈訳、法政大学出版局、1998年)。

John Mulvihill, "The Nuclear Age by Tim O'Brien," *Iowa Journal of Literary Studies* 7, (1986), pp. 169-171.

Joshua Hoffman, Gary S. Rosenkrantz, *Substance among Other Categories*, Cambridge University Press, 2007.

Simon Critchley, Reiner Schuermann, edited by Steven Levine, *On Heidegger's Being and Time*, Routledge, 2008. (サイモン・クリッチリー、ライナー・シュールマン『ハイデガー『存在と時間』を読む』串田純一訳、法政大学出版局、2017年)。

Søren Riis, translated by Rebecca Walsh, *Unframing Martin Heidegger's Understanding of Technology: On The Essential Connection Between Technology, Art, and History*, Lexington Books, 2018.

ティム・オブライエン『本当の戦争の話をしよう』村上春樹訳、文春文庫、1998年。

ティム・オブライエン『ニュークリア・エイジ』村上春樹訳、文春文庫、1994年。

ハイデガー・フォーラム編『ハイデガー事典』昭和堂、2021年。

マルティン・ハイデガー『技術とは何だろうか —— 三つの講演』森一郎訳、講談社学術文庫、2019年。

秋富克哉『芸術と技術 —— ハイデッガーの問い』創文社、2005年。

荒畑靖宏『世界内存在の解釈学 —— ハイデガー「心の哲学」と「言語哲学」』春風社、2009年。

稲田知己『世界に住むということ』秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編『ハイデガー読本』所

---

んなふうで、とことんのところへ来て、具体をすつと出せる男というのは凄いな、と痛感したんです。玉葱の皮を剥くようにして、我々の内心を剥いていくと、ひと皮ずついろんなものが現れますね。内心とひとくちにいっても、概念的なところもあるし、前代から受けついでのようなものもある。それを身幅の中に入れて自分の心に行っているわけでしょう。そうして大方は、芯まで剥きません。剥くのを中止したり、死んだりしてしまうわけです。父親は、自分で芯まで剥いていくのです。そうして芯のところ、穴掘りというちゃんとした具体があるのです。僕ははじめて、本当に父親を恐ろしく思いました」(色川 209-210)。

- 収、法政大学出版局、2014年。
- 井上義夫『村上春樹と日本の「記憶」』新潮社、1999年。
- 色川武大『百』新潮文庫、1996年。
- 小田切建太郎『中動態・地平・竈 ——ハイデガーの存在の思索をめぐる精神的現象学』法政大学出版局、2018年。
- 柏端達也『現代形而上学入門』勁草書房、2017年。
- 加地大介『穴と境界 ——存在論的探求』春秋社、2008年。
- 加地大介「穴の物象性と因果性」、『現代思想 2017年12月臨時増刊 ——総特集 分析哲学』所収、青土社、2017年、70 - 79頁。
- 門脇俊介『理由と空間の現象学』創文社、2002年。
- 串田純一『ハイデガーと生き物の問題』法政大学出版局、2017年。
- 河野哲也『境界の現象学 ——始原の海から流体の存在論へ』筑摩書房、2014年。
- 鈴木生郎・秋葉剛史・谷川卓・倉田剛『ワードマップ 現代形而上学 ——分析哲学が問う、人・因果・存在の謎』新曜社、2017年。
- 須藤訓任『『存在と時間』第2篇評釈 ——本来性と時間性』岩波書店、2020年。
- 高屋敷直広「生をあらわにする「身振り」」、『ハイデガー・フォーラム vol.15』ハイデガー・フォーラム編、2021年。
- 森一郎『核時代のテクノロジー論 ——ハイデガー『技術とは何だろうか』を読み直す』現代書館、2020年。